

## 9章 サムソン、最初の自爆攻撃者

パレスチナ人の自爆攻撃者の問題は、世界中に知れ渡った問題となっています。イスラエル・パレスチナの内に住む人であれ外に住む人であれ、自爆攻撃を市民に対する原始的で野蛮なテロリズムであると非難するのも、それをパレスチナ人の尊厳を踏みにじり、その存在自体を非人間化している抑圧的な占領に対する正当な手段であると容認したり、指示したりするのも、簡単なことです。

クリスチャンとして、私はキリストの道は非暴力の道であると知っています。それゆえ、私はイスラエル政府によるものであれ、パレスチナの武装グループによるものであれ、あらゆる種類の暴力とテロリズムを非難します。でも、だからと言って、すべてのクリスチャンが非暴力を信じているということではありません。それどころか、西欧の「キリスト教」国は世界史上最もむごたらしい戦争を起こしてきましたし、最悪の残虐行為、人権侵害を行った責任があるのです。

しかしながら、この点をはっきりさせた上で、読者の皆さんに、自爆攻撃という現象が多くのパレスチナ人の深い悲慘と苦痛の中から悲劇的に生まれてきたことを理解していただくことが重要です。健康で美しく知的な若い男性や女性が人を殺そうとしたり、殺されたりする時には、何かが根本的におかしいのです。どうして世界の人々は彼らが正義を求める苦悩の叫びを聞いてこなかったのでしょうか？これらの青年たちは、そして犠牲者たちも、生きることができて当然な人たちでした。

### ◆背景

イスラエルによる西岸地区とガザの占領に対するパレスチナ人の抵抗は、1993年に重要な転回をしました。若いパレスチナ人の男性たちが、そして後には女性たちも、体に爆発物を巻き付け、ユダヤ人の居住地区に行き、兵士や市民で混み合っているところで自爆し、周りにいる何十人もの人たちを殺傷するようになったのです。1994年4月にアフラであった最初の自爆攻撃から2000年9月末に第二次インティファダが始まるまでに、自爆攻撃によって120人のイスラエル人が殺されました。それから2002年6月19日までに、パレスチナの武装グループは56回の自爆攻撃を仕掛け、兵士、市民、男性、女性、子どもを含む225人のイスラエル人を殺害しました。この同じ期間に、イスラエル軍は、警察官、男性、女性、子どもを含む1645人のパレスチナ人を殺害しました。2005年までに165回の自爆攻撃がありました。イスラエルの人権団体ベツェレムによると、2000年9月から2008年3月までに452人のイスラエル人が自爆攻撃で殺されました。

歴史を見れば、自爆攻撃が起こる根本的原因が分かります。第一次湾岸戦争が終わった後の1991年10月、米国のジェームズ・ベーカー国務長官は平和会議を呼びかけました。マドリードで会議が開かれ、アラブ諸国とイスラエルが出席しました。PLOはまだテロ組織と考えられていましたから、パレスチナ人はヨルダン政府の派遣団に加わって出席しました。国連決議242と338の実行に繋がることを期待されていました。その代わりに、交

渉は紆余曲折を経て、1993年のオスロー平和交渉に道が開かれました。多くの人が熱狂し、懐疑的な人々もいる中で、パレスチナ人はオスロー平和交渉に入り、イスラエルの隣人たちとの合意に至る希望を抱いていました。民主的に選ばれた指導者による自治政府ができることで、この交渉は促進されると期待していました。その代わりに、オスローは、イスラエルの支配と統制を揺るぎないものにし、パレスチナ人の経済的状況を悪化させ、何百もの検問所、土地の没収、入植地の拡大（国際法に違反しています）、抑圧の強化によって、占領地は細分化することになったのです。

◆背景にある原因：正当化するためではなく、理解するための努力

歴史的には、西岸地区とガザ地区の占領は1967年に始まったのですが、最初の自爆攻撃は、オスロー平和交渉が始まってから、1993年に起きたのです。言葉を換えて言えば、それまでの26年の占領の間、パレスチナ人の抵抗は「自殺的」ではなかったのです。自爆攻撃が起こるようになったのは、イスラエルから受ける抑圧と屈辱が深まってますます多くのパレスチナ人が失望するようになり、国際社会がパレスチナ占領について決議したことを実行できないことが明らかになったことで入り込んできた落胆、希望のなさに起因するのです。

このことは、アブデル・バセッ・オーデの話で、よく分かります。彼は若い青年で、2002年3月にネタニアのパークホテルで自爆し、28人のイスラエル人や観光客を殺害し、それを機に、イスラエル政府は1967年以来最大の西岸地区への侵攻となった「防御の盾」作戦に入りました。6ヶ月前、イスラエル政府は、オーデがバグダッド出身のフィアンセと結婚するためにヨルダンに行くことを許しませんでした。イスラエルの諜報局シンベットは幾度も呼び出していました。彼は行くのを拒みました。よくあることなのですが、密告したり、協力者になるように圧力をかけられると考えたからです。彼は25歳で、結婚して家族を作り、ヨルダンに住み着いて、人生を楽しもうとしていました。イスラエル軍によって将来の夢がずたずたにされたとき、彼は自爆攻撃に転じたのです。彼の父は、息子の行動は、侮辱を受け、心を砕かれたためだとしています。家族はテレビのニュースで初めて自爆を知りました。

こうした話は、パレスチナ人のコミュニティにはあふれています。いくつかの基本的な共通要素があります。軍による屈辱的行為を受けたこと、親戚や友人が殺されたり傷つけられたりしたことに対する復讐の欲求、イスラエルの占領による絶望や失意、失業や監禁、収監と拷問、希望がないこと、人種主義、差別などです。言い換えれば、これらの若者は「テロリスト」に生まれたわけではないのです。私たちと同じように、彼らは神さまの似姿で生まれました。いのちと自由を愛する人間として生まれました。例外なく、彼ら全員が、イスラエルの軍事占領の下で生まれています。彼らが知っているユダヤ人とは、銃を持ち、彼らを脅し、非人間的に扱うイスラエル人兵士たちだけでした。彼らは、占領の試練の中で、形成されたのです。イスラエルは彼らをテロリストとレッテル貼りするかもしれませんが、結局のところ、彼らはイスラエルの占領が作り出したのです。

これらの若いパレスチナ人たちは、自殺したくて自爆したのではありません。1993年以前、彼らは占領に抵抗していましたが、それは公然活動によっていました。イスラエルは、彼らに対する抑圧的、懲罰的な方策を取り始めました。パレスチナ人指導者を暗殺するために軍用ヘリコプターを使ったり、F16戦闘機で人々を殺害し、家を破壊したり、軍の検問所を急速に増やして人々を統制し、屈辱を与え、町や村を封鎖したり、包囲攻撃したりするようになったのです。自爆攻撃は、抵抗するため、また彼らが経験していた苦痛に対して報復するための、有力な方法と見られるようになりました。さらに絶望に追い込まれるようになって、どんな方法であれやり返したいという欲求が強まりました。パレスチナ人の観点からは、真の抵抗の連鎖は次のようなものです：イスラエルの占領に対してパレスチナ人が抵抗した。イスラエルは占領政策をさらに抑圧的にし、それに対してパレスチナ人はさらに抵抗の取り組みをさらに展開した。こうして、暴力の連鎖は衰えることがないのです。

#### ◆イスラム教徒の視点

自爆攻撃は、宗教的な根拠が強調されることで、さらに力を持った現象になりました。ハマスのリーダーのカレド・マシャールは自爆攻撃の主要な論拠として3つのことを挙げています：宗教的論拠、民族主義的ないしは愛国的な論拠、そして人道的な論拠です。三つめの人道的な論拠とは、他の人々が生きることができるよう自分を犠牲にするというケースです。

宗教的な次元が後から加わって自爆攻撃の利用に関する政治的決断を増進させたのか、宗教的な意義が先行してそれを促したのか、どちらなのかを判断することは困難です。おそらく、両方なのでしょう。武装活動家だったのか、その場に居合わせた罪のない人であったかに関係なく、パレスチナ人がイスラエルに殺害されると、殉教者と見なされました。結果として、ハマスのようなグループは、これらの行為を自爆攻撃としてではなく「殉教の作戦」「対抗手段としての殉教」と言い表します。民族主義と信仰が混ざり合い、より強力に鼓舞されました。多くのイスラム教徒のパレスチナ人が自爆攻撃者を殉教者と見なし、天国に迎え入れられたと信じました。天では、赦しと、神の預言者たちとの交わりと、審判の日の彼らの親族たちのための執りなしの祈りによって、報われていると信じられています。

シーク・イシュマイル・アドワンは、説教で殉教について次のように話し、それはパレスチナのテレビで放映されました。「シャヒッド（殉教者）が神に会う時、彼の罪は殉教者が流した最初の血によって赦される。墓に閉じ込められている状態から解放され、天にある自分の席を見る。彼は審判の日から救われており、彼には72人の黒い瞳の女性が与えられる。彼は自分の親族の70人について赦しを請うことができる。」殉教者たちは、実際、神の義のために戦っていると信じており、それゆえに天に迎え入れられることは保証されていると考えます。この点に関わって重要なコーランの箇所を挙げましょう：「神の道を歩んで殺された者を死者の内に数えるな。彼らは、主に養われ、主と共に生きているのである。」（コーラン 3:169）

2002年6月29日のアルジャジーラの衛星放送におけるインタビューで、カレド・マシヤールは、もし国際社会がパレスチナ人を公平に扱っていたら、殉教作戦に訴えなければならぬ理由はなかつたらと話しました。彼は殉教作戦はいくつかの意味できわめて有効であると話しました。イスラエルが許容し続けることができないような規模の死傷者を作り出す点、ユダヤ人がイスラエルから外国に移住する動きを作り出す点、イスラエルにおける失業率を上げ、経済を悪化させる点、イスラエル人の信念を低下させる点、そして何よりも、イスラエル軍がそれを止める手段を持たない点。

言葉を換えて言うならば、武装イスラムグループは、自爆攻撃を、単に甚大な人的被害を与えるだけでなく、イスラエル社会に広範にわたる精神的な傷手を与え、イスラエルの脆弱性を露呈させるものと見ているのです。実際、自爆攻撃は、イスラエルを揺さぶり、多くの人々の間に恐慌状態と恐れを作り出しました。結果として、イスラエルはメディアによるパレスチナ攻撃を強化しました。イスラエル・パレスチナにおいても、国際的にも。イスラエルを「テロ」との戦いの中にある米国と同様な窮地に置かれているとして、パレスチナ人のテロをオサマ・ビンラーデンと彼のアルカイダ・ネットワークによるテロと同じであるとして。イスラエルは、パレスチナを違法に占領し、その全てを支配していることには言及しません。西欧の多くの人々、特に米国の人々は、イスラエルの罠に嵌って、2001年9月11日に米国で起きたことと、残忍で厳しい占領の下で人々に起きていることの、区別がつけられません。

パレスチナとイスラエルの圧倒的な軍事力の不均衡を考えるならば、自爆攻撃は、与える恐怖において相対的な均衡をもたらしたと言うパレスチナの武装活動家もいます。パレスチナ側の死傷者の数はイスラエル側に比べて約四倍です。しかし、自爆攻撃は、不安と恐れを広めることでは引けをとらない成果をもたらし、また劇的に死傷者を増やしたと言うのです。武装闘争を支持する人たちは、自爆攻撃は、弱者は思われるほどには弱くなく、強者は自分が考えるようには強くないということを見せつけていると信じています。

ハマスの指導者マシヤールは、神と郷土のために120人が身を献げたと話しています。半分は大学を卒業した青年でした。他のほとんどは高校を卒業した青年でした。小学校までしか出ていなかった青年は数人です。ハマスの他の指導者は、パレスチナ人に殺されたイスラエル人の75%は自爆攻撃によっていると、テレビで語っていました。イスラエルがそれを「テロリズム」と呼びたいのであれば、そう呼ばばよい、イスラエルの首相だった故イツハク・ラビン自身、テロリズムを「弱者の兵器」と呼んでいなかったか？と語っていました。

イスラム法は非戦闘員を殺すことを禁じており、罪のないイスラエル人を殺すのは間違っていると論じるイスラム教徒たちもいます。コーラン学者で、ワシントンDCのジョージワシントン大学のイスラム教のチャプレンであるイマーム・ヤフヤ・ヘンディは、ジハード（聖戦）と殉教とテロリズムと暴力についてコーランの観点から彼のウェブサイトでも論じています（※ <http://www.imamyahyahendi.com/>）。彼は個人におけるジハードを強調します。それは、魂と霊を罪から清めようとする内奥における闘いなのです。このジハード

がまずあって、その上で抑圧や罪に対して戦う物理的なジハードがなされるものと理解されています。「あなたに対して戦争を仕掛ける者に対してアッラーの義のために戦いなさい。しかし、罪を犯してはならない。アッラーは罪を犯す者を愛されない。」(コーラン 5:32)という箇所を注釈して、これは侵略に対する防衛戦争について述べており、侵略をやめさせること以上は許されないとしています。「正義の回復が問題なのです。戦うことに充実感を覚えるから戦うのではなく、圧政があるから戦うのです。」正義の強調は、市民が殺されるべきでないことを含意します。

イマーム・ヘンディははっきりと、神に仕えて死ぬ者は殉教者である、「ただし、その奉仕は、テロリストの行いとは違った性質のものでなければならない」と述べ、次のように例を挙げています。「私が説教壇で説教しているとしましょう。もし神について述べたことが原因で、誰かが私を銃で撃つなら、コーランは、私について、本当には死んでいない、神と共にいるからである、と述べるのです。私の魂は生きているのであり、神が私を維持されるのです。ですから、殉教者の資格を主張するために、テロリストは、『正義』のために戦っていると自らを納得させればよいこととなります。もちろん、それは極めて主観的な問題であります。テロリストは、米国人を傷つけるのは、『正義』のために仕えることであると考えます。彼らはコーランの章句を利用します。」

イマーム・ヘンディは、コーランには、他者に危害を加えてはならないとする殉教に関する章句が多くあることに注意を引きます。そして、「神殿、教会、シナゴグを攻撃してはならない。木や草を倒してはならない。馬やラクダに危害を加えてはならない」という預言者モハメッドの言葉を引用しています。

イマーム・ヘンディや、多くのイスラム教徒は、コーランはテロリズムを禁じていると信じているのです。「モハメッドは軍の指導者で、それゆえ暴力を使いましたが、コーランは暴力を許していません。旧約聖書にもあるように、コーランには軍事的勝利を祝う箇所がありますが、コーランが全体として主張するのは、抑制的な見方です。

イマーム・ヘンディは、コーランには、他者に危害を加えてはならないとする殉教に関する章句が多くあることに注意を引きます。そして、「神殿、教会、シナゴグを攻撃してはならない。木や草を倒してはならない。馬やラクダに危害を加えてはならない」という預言者モハメッドの言葉を引用しています。

イマーム・ヘンディや、多くのイスラム教徒は、コーランはテロリズムを禁じていると信じているのです。「モハメッドは軍の指導者で、それゆえ暴力を使いましたが、コーランは暴力を許していません。旧約聖書にもあるように、コーランには軍事的勝利を祝う箇所がありますが、コーランが全体として主張するのは、抑制的な見方です。…『我々はイスラエルの子らのために定める。もし(イスラエル人の)誰かが一人の人(イスラム教徒)を殺したなら - それ誰かが殺害されたためであったり、危害が広がっているためでないのなら - それはその全ての民を殺したのと同じこととされるであろう。もし誰かが一人の命を救うなら、それはその全ての民を救ったのと同じこととされるであろう。』(コーラン

3:169)」（※括弧内は真野が解釈して加えてみました。）

この章句は、ひとりの命の聖性に大きな価値をおいています。「もし一人の人を殺したら、それは全人類を殺したのと同じなのだ」とイマーム・ヘンディは言うのです。

#### ◆自爆攻撃に対するパレスチナ人による非難

パレスチナ人の連日の殺害に対する報復の欲求と占領の残酷な状況から自爆攻撃を支持する者がいる一方で、パレスチナ自治政府のメンバーを含め、多くのパレスチナ人がそれを非難しました。米国政府は、自爆攻撃を非難し、パレスチナ自治政府に同様な行動をとることを期待しますが、他方で、イスラエル政府によるパレスチナの指導者や一般市民の殺害は止むことがなく、それは自衛のためとして公式な非難を受けることがないのです。

パレスチナ社会の多くが自爆攻撃を支持していないことを、改めて、はっきりと申し上げます。同情的なパレスチナ人はいますが、多くが非難しているのです。2002年6月16日、パレスチナで最もよく読まれている新聞アルカッズ(Al-Quds)に、58人のパレスチナ人の指導者（男性も女性も含み、イスラム教徒もキリスト教徒も含む）が署名して、自爆攻撃を止めるよう呼びかける声明を出しました。声明で、自爆攻撃は、パレスチナ人とイスラエル人之间にある憎しみと敵意を広げ、深めて、二つの民族が二つの国家に隣り合って生きる可能性を壊すことにしかならないと、はっきりと述べられました。署名者たちは道徳的理由から自爆攻撃に反対する立場をとりました。声明はまた、自爆攻撃は逆効果であり、パレスチナ建国には結びつかないこと、むしろ逆にイスラエルのいや増す残虐な攻撃を正当化することを許してしまうと論じていました。

声明は五日間連続で新聞に掲載され、その後はウェブサイトに掲載されて、数百人が署名者に加わりました。500人を超える人々が、どんな自爆攻撃であれ、もうなされないことを願っていることを明らかにしました。

今日、パレスチナ社会は、これまでも増して、自爆攻撃に対して反対する立場をとるようになっていきます。ほとんどのパレスチナ人が、そうした爆撃を正義と道徳的原則に反し、効果がないものとして拒絶しているのです。

#### ◆イスラエル人の受け止め方

イスラエルの中には、自爆攻撃を止めさせるためにもっと徹底した厳しい手段を取るよう求める声があります。最も大きな声を上げていた一人がギドン・エズラです。当時、公安副大臣だった彼は、2001年8月19日、自爆攻撃をしたパレスチナ人の家族を処刑するように政府に求めました。自爆攻撃を考えている者たちも、家族が処刑されると知ったら、思いとどまるだろうと論じたのです。明らかに、エズラの提案は、国家の安全を脅かすと疑われる者の家族を逮捕したり、苦痛を強いたりしたナチスのやり方に基づいていました。ヘブライ大学の歴史家モシュ・ツィンマーマンは、ナチスの下では、誰かがドイツ人兵士を撃って捕まらなかった場合、50人が縛り首になったと述べています。エズラの発言がイスラエル政府から何の抗議も批判も受けなかったと知って、ショックでした。幸いなこと

に、イスラエルの中の全て声がエズラのように極端なわけではありません。

逆に、イスラエルでは、パレスチナ人に対する過酷な政策こそが自爆攻撃者を育てているとして、それらを見直すように呼びかける勇敢な声が聞かれます。1997年9月、ひとりのパレスチナ人の自爆攻撃によって、ラミとスリット・エルハナン夫妻の14歳の娘が殺される事件がありました。子どもを失った悲劇にもかかわらず、この両親は平和構築のための活動に熱心に関わるようになりました。彼らは娘の死の責任がイスラエル政府による占領にあるとして、それを「テロを育てている癌」と呼びました。「イスラエルは子どもたちの墓場になってきている。聖地が荒野に変えられようとしている。私たちの娘はイスラエル政府による占領のために殺されたのだ。どちらの側の無実な被害者も、占領の犠牲者なのだ。」ラミの祖父母、叔母、叔父は、ホロコーストで殺されました。ラミは言います。「私たちの美しい娘を失った痛みは耐え難い。しかし、私たちの家は、憎しみの家ではない。」スリットは言います。「ハマスは人々の怒りから力を得ている。もし占領を終わらせ、人々の尊厳、名誉、財産を回復するならば、ハマスは力を失うだろう。」夫妻は、イスラエル軍によって16歳の息子ラミイを殺されたパレスチナ人のイザット・ガザーウィと共に「子を奪われた家族のフォーラム」を設立しました。

2002年6月27日、正統派ユダヤ教徒のシャマイ・レイボヴィッツは、「イスラエル将校からのブッシュ大統領への応答」と題した手紙を書きました。「私は正統派ユダヤ教徒で、テルアビブで刑事事件弁護士をやっています。戦車の砲撃手の予備兵で、占領地での軍役を拒否した1000人の兵士のグループに属しています。このグループのメンバーの多くは、過去数ヶ月間、軍の収容所に投獄されています。」そして、彼は次のように続けました。「ブッシュ大統領の『計画』が明らかにされたので、その計画が役に立たず、意味がないことを悟るまで、どれだけの時間がかかるのかと、我々は思いを巡らしています。…パレスチナが丸ごと残酷な占領の下に置かれている間は事態が改善されることはないということを理解できていないことが、この政策の基本的な欠陥です。ブッシュ大統領は、自爆攻撃が大規模な飢餓とパレスチナの人々が味わっている屈辱から生まれていることを理解していません。イスラエルによる占領を直ちに止めることだけがパレスチナ人の蜂起に直ちに終止符を打つということを認めるのを拒否していることで、ブッシュ大統領の援助は私たちに多大な害を与えています。私たちは、350万人もの人々が、テロリストになってイスラエル軍のヘリコプターや戦車や迫撃砲による爆撃や威嚇に復讐するほかに、将来がなく、希望がなく、展望を持たない状況を目の前にしているのです。ブッシュ大統領はこの地を踏んだことはありませんが、私たちはここに住み、いかにパレスチナ人たちが、ありとあらゆる仕方で、踏みにじられ、日常的に基本的権利を拒まれ、包囲され、占領されてきたかを見てきました。ユダヤ教は、私たちに、正義がないところには平和はないことを教えています。…ほとんどのイスラエル人は、心の奥底では、この民族に屈辱を与えるのを止め、抑圧するのを止めるならば、存続可能なパレスチナ国家と隣り合って、安全で不安のない民主的なイスラエルが実現されるだろうと知っているのです。」

(※以下の翻訳は未完)

◆サムソンの物語

○サムソンは、自爆攻撃者だったのでしょうか？今日の自爆攻撃者に置き換えて読むことは正当でしょうか？

○神は、何千人ものペリシテ人の死を喜ばれたのでしょうか？神は、今日の自爆攻撃者を通して働かれていますのでしょうか？

○我々は、サムソンも自爆攻撃者も非難する勇気を持っているのでしょうか？または、サムソンも自爆攻撃者もたたえる勇気を持っているのでしょうか？

○古代のペリシテ人がヘブライ人に対してやっていたことと、今日のイスラエル人がパレスチナ人に対してやっていることは、同じように見なすことができるのでしょうか？

○神は、正しかろうと誤っていようと、常に「イスラエル」の側に立っているのでしょうか？